俳諧七部集

松尾芭蕉師
俳負分

七

井上氏蔵

曠野集負外

誰ゝ夢をはたちまぬ世とおもふ
市中ゝあとて朝のくもゝ
又舞ゝ京東四明ゝ麓ゝ
きて花のゝゝゝゝハこ洲をんゝ
ゝゝゝゝ佐川田喜ゝのゝゝの山
あさ物ゝゝとゝゝへるゝゝをゝ実
ゝゝんすゝ

麥嗜し屋をゝゝゝゝゝ
世々尾陽の野ゝゝゝゝ
芭蕉翁の作ゝゝゝゝゝ

笑しにいつ比田野へ居ながら
実は世間武蔵のむさしあるき
きまる人の中に虎のあ信と
ながら遊ぶ武蔵人あるくく
独色なる寒しるるし後の
杜鵑ふへうさ所ある左のとし
橋をなして寳にてあること老
あることといへるも寳の字老の
杜乃ながらあるをや杜鵑の
自武蔵をひして

素堂

麦をわ蕎麦まよ花咲ぬ方あり

この文人乃ながつつの常なく
なりけり武蔵をこそ人間き
常変を吟しして

まをさしかさすみ笠ひ雨ふ 野水

鏡の鏡をろくまの手て 荷今

ものをのうなる杜こ来う利 越人

門ゆ石自信園のやまひ 水

風の月利を郭秋乃ながく 今

武士乃鷹うつ山を尋て　人
ちをりてつゐの雪をる　水
袋らを経と見出の雪のうへ　今
浦ふと降らん紙くるほもしろ　人
ちくを松の直きを乃鶴　水
千匂をかむ小山ゆうゝ　今
姫さみゝ一ゑ梅も咲ぬ　人
あてをもなき夕月夜の影　水

高の分を泥の雪ゆるあらは　今
秋ぬなを吹く嵐人乃妻　人
吹るゆら西を東を鐘乃壱　水
さふゝふるる利根の川舟　今
みゝの白ゆてうゝてかき墨　人
承子ゆりと羽織うちまて　水
ふゝとさ乃姫の市の場へ　今
孤つをゆ人のえるゝ舞　人

柏木の脚元の比のつくしと　水
さくやまとのこゝろゆきつる　今
月乃氣くらべ合こゝろ辻お撰　人
秋さなゝ原くゝ事星乃厠桶　水
高きく紙芸の稼こ出る蓋　今
くれとゝの姫乃彼乃茶化　人
かこゝる諌こ濃こ原ゝ　水
史箸ゝくゝまのあつき　今

きくすゝのくゝをくゝ人のこゝ　人
ゝせゝとゝくゝ池乃かゝとゝ　水
むゝの事教ゝいゝゝゝゝ　今
抑くゝ芸姫くゝ加根なの楽　人
墨ゝ史ゝ正月ゝわゝ　水
大根ゝゝくゝてゝいそかし　今

遠ゆや浪に志をさす櫛とも子　　乗洞

はるゝ舟夏ゝ酒のあさ星　　荷今

のとゝ〜やゆくり泊ふ荷を解て　　昌碧

百足乃懼る茶さゝ〜茶　　野水

夕月の雲ゝ白をぐら泳　　舟泉

夜寒の蓑を裾ゝ引き物　　釣雪

萩乃露ノとこともさらぬ所そや　筆

一駄るて　見も　古綿　亀洞

そのうるはしさ　冬ごもる　宮殿の麻　荷今

京すがたやふる年　宗　昌碧

いくつとあくてめつらし蔵莚　釣雪

湯殿さいとのもをむらい也　舟泉

宗しやと莚ちしくる川の鶴　野水

ちらかれるやうに　月　荷今

秋風ノ女車の髪ばたき　亀洞

袖そ寒ノ　法論　釣雪

時雨ノ　ものさへくさめのち　昌碧

ぬるる山吹ちしなるべし　野水

日乃いてやうふる仏ん腹ノ　舟泉

ふやらけす　土ちゝ　あれ木　亀洞

向まて寒やるほの小ふひにて　荷今

垢離かく人の足ものぬ雪　昌碧

配所よりて二月の夢のかゝ減えて　釣雪
三のうらふるあめのあとゝ　舟泉
むく起るあひつゝきて赤腦を　野水
門をるり茅ぶきこむ　荷今
いとゝみし是怪所の藪沼し　亀洞
松毋はまもられる面風　釣雪
ふるとの雪ふるちのとの下戸月　昌碧
やゝさつ秋乃やゝあのとなる海　野水

つゝくも松毋の鳴る寮の窓　舟泉
ふるさとゝ安房乃小湊　亀洞
夏の月やとる泥の照り　荷今
桶のかつゝ入しまひ　昌碧
人なゝに脇差して出より　釣雪
ついゝとに鶴ゝ進　野水

[illegible]

舟泉

柳の[illegible]　松芳

夕[illegible]　文

[illegible]　荷兮

秋草の[illegible]　松芳

弓ひき[illegible]　舟泉

ふる雨の拾ハむとこそ思ふ　荷兮

ゆ〻しく　秋の中　秋末のし　冬文

火鼠の皮衣　あらしく　舟泉

涙ぞ　ゆくうら笑はつ　松芳

ゑるこゝ宗鴎　ゆくてそ　冬文

酒の半く　膳をもちてゐ川　荷兮

米ゝ年　年頃礼をすに　松芳

ゝまて双鳥　絵生ゑ　舟泉

なるゝもうち志先ぞ　むの鼠　荷兮

月のたぼろや　元ゐ井乃夜　冬文

灯ぞ　ぬ　ひつ　ものゐ　舟泉

踊珠　ゝ　ゝ　脇息のゝ　松芳

陰辰　入歯　ゝ　ゝの志ハ　冬文

十日のさく　ゐ　ゐ　荷兮

山星の秋　ゝ　ゝ　生　蠟　松芳

半ぬ　ゝ　ゝ　ゝ　舟泉

さふ〳〵とあの紙を屋の月の影　荷今
馬乃とを沈てるのいあ〳〵　冬文
さし〳〵さを舟の春のあけ雨　舟泉
蓬ぬまく〳〵蓬麦あふつゝ伸　松芳
つく〳〵と綿つるるのくとまく　冬文
曙姫のく提燈品　ゝむ　荷今
けーの花さアとあとをするく　松芳
味噌するもの隣ーさハゝし　舟泉

黄昏乃門さまゝけ薪分　荷今
沈〳〵よあてゝ沢なふ　冬文
春苑の赤貝ときゝあゝ兒　舟泉
新見さもとるゝ落こゝ　松芳
ときゝ夕や湯参をかひよ　冬文
物〳〵面白ゝ山口の家　荷今

かくさくさす　法師のおもあて　荷今

雨の力の秋さくさてる戸の口　野水

引捨し　車ハ琵琶のかさぎさて　同

あくさう秋くもし人のくかい　荷今

月の秋歳乃さくさくさ出るや　同

一ツ荷にあしし　雨降乃きくくす　野水

初あらしこそ世の寡の情なれ　水
菜畑の畑もしめやかなるこそ　今
土肥をなくこうきよせらく　仝
京判おとす神そあらしの　水
通路のつゆをとけて迎かへ　仝
六位のあるし意のうハさ　今
代よいとこそやきりとられひく　仝
銭一貫文鯉　一節　水

月乃紅葉はもくい拾くて　仝
茶呼こそ楽といふまつなり　今
天仙碁こそ冷食あさしもれ　仝
う者かもうけくく菊紅の中　水
たく人とな楽てこそ稲ふとと　仝
夕せもきを泥ついてやる　今
駒のやとはもを信濃ハ早変　水
秋のあらく菅原播磨　今

生見明　水

八月乃月のさやけいるさく　今

山乃鶴と松と桃とのかすゝ高き　水

きはさゝめてくくとする　今

昊ゝきはや服うゝゝると引籠る　仝

太敲たゝ紀ゝ階子乃なるゝ　水

ゝゝゝゝ嵯ゝる末賃の竹枕　今

元たゝのゝゝゝ舞ゝゝ　水

ゝゝ一三年　仝

庇をつきゝ住居かゝ如　今

三方のゝむつゝ史ゝゝる　仝

供奉乃竹鞋を食へゝゝみ　水

隠ゝゝゝ小塩大原堤城の也　仝

人ゝひよりはるの川　岸　集

月さしの[illegible]昼の[illegible]
[illegible]
同中宗[illegible]
[illegible]

月さし[illegible]
蚊の[illegible]　越人
[illegible]　傘下
[illegible]　同
[illegible]　人
使の者[illegible]　同

あれこれと猫の子を選るまあしよ　筆
とし豊るまてしあほうしやり　下
とこてやうものゑさてあるな　同
まくはもけるなるすこのわ　人
大鯰乃人よ法華をこあさやく　同
身をうりメてゑ絵ゑう体　下
嗜ふ柿もメくふるさも皆濃一　同
秋乃きをを細みるまう　人

ワのまくいつゝ世芸を宵くへを　同
寝まのくまくを文字ゆゆるむ戸　下
花の賀くくくるるるる後まつ　同
まるの糊ゆこをまくの雑　人
うち刺くくくの宿の宿の宿ニくを　同
四へをいをてなをゆゆ　犬　下
酔をのあゆゆくを吐の郷　同
あくを雨うなを雨乃降出し　人

歌あそび　同
きく猷之のこゝろ　下
灯　基弘油こゆて押くし　同
白をたとせてきりてを　人
蛍こゝろ之のこゝろくらのふりしと　同
半をこそすゝ　篠やの月秋　下
むつくとりの新の新　同
人の待こゝろ　人

にきはくこゝろや黄やを荷ひを　下
干をゆ雪のこゝろの所　中　人
わらくやしい法の宿ちを時ら　下
皆同こゝろより　人
百万ひこゝろ　下
四楽をゆくさめこゝろ　人

深川の巣　越人

[illegible]　芭蕉

[illegible]　仝

[illegible]　越人

[illegible]　仝

[illegible]　芭蕉

かなしさも長安見る月の地　仝

腎の杉風をとひ侍り　越人

いそうと師走乃てをうるく　芭蕉

あるとし世話やく寺の松下り　越人

比丘尼と古き手まをもつて　芭蕉

足駄ちのゝ地雨乃あけぼの　越人

きりぬ〳〵やあるとかをくあるかな　芭蕉

うの花ひとたゝぶ壱乃ちつく　越人

手とつの雪屋の片膳をすゝめ　芭蕉

物いそくさき舟路大ゝ乃雪　越人

月よむ比良のうるをを小ぶて　芭蕉

市〳〵雀さゝつるころも肌ぬゝ　越人

破れ笠の釘うち付ける末　仝

人をハさゝ〳〵こゝ麥みひきハ　蕉

家ゆくて眼鏡衣をぬむ十すす鏡　人

その杉あひあるゝ神ゝみものゝ　蕉

人去ていまだ埃乃白ひかるの　人
弥勒寺籠り堂ひとり片隅　蕉
かやとりまた風のあるくれはて　人
煩悩のさとり寂しく　蕉
あやにくと桜の蕾ひとつ　人
いのちをたのみてもみて　蕉
月日ひとつ過ぎにけり　人
作も遠く鶏いねふり　蕉

秋の田をかりもぬけるひとく　人
さいく文字問ひくるる　蕉
いろ〳〵風底に木葉金　人
鉢を東野子乃禅くひあり　蕉
宝の比徒義をもやはし　人
田ゐ一をくふく腥きくち　蕉

翁と伴なひて[illegible]の

[illegible]　　其角

[illegible]荷[illegible]文也天津厂

三[illegible]さの月見[illegible]　越人

蔦萩の庭さ[illegible]川つゝて　仝

飯[illegible]　角

[illegible]て袖[illegible]夏衣　仝

歯さ[illegible]あるよの[illegible]　人

怪しる間まつるとゝ[illegible]ゝく　人
静御前くゝ舞をすもる　角
空蟬の羅縅乃紙のたゝ[illegible]　仝
あとゝゝ[illegible]ゝる金二万両　人
いとをしさゝとゝ他人をゝ[illegible]　仝
やけとゝをしてゝつゝゝる　角
間敷さ耳くつゝゝる[illegible]　仝
負をもつゝぬ月のに形冊　人

そゝいろの冨士を陸奥くゝ紙の紙　仝
なゝゝしゝゝる草乃一瓶　角
饅頭をゝ神くゝさ神くゝ包ゝる　仝
うゝさせゝつゝて死ぬ人ハ損　人
西王母東方朝を用ゝゝゝす　仝
ゝゝ鸚鵡の舌乃ゝゝゝゝ　角
あゝさなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ妻　仝
恋の親ゝゝ[illegible]ゝ　人

や、行ゆく春を惜しみて　仝
来つゝ青き師走なかばの　角
夕移宿の寒き服乃津　仝
いつゝ川の行きを待つ強力　人
穴いちよ塵ちゝひ草枕　仝
ひいかゝりつゝ伊勢の八朝　角
満月を不断の橋を渡るや　仝
念者法師ゝ秋のあきの彼　人

夕まぐれ寒き鳥の子　仝
ちらちらひらる雲あきのまと　角
ゝをゝゝゝ食の強字恒　仝
ものゝ鳥士の園とゆひて　人
なのもまあちつゝ脇ゝとりや　仝
むしゝゝ麦へき嗅煩乃　仝

嵐雪

あるべきしるべ八人の醒覚

秋うすく寒し いつも陽炎　越人

月の宿書をひきすゆるなれて　仝

分面茅の草引けさ　雪

もゝあひうく牧さやらぬ　仝

川越うつる城下のうら　人

疱瘡息の遠とをるかと歯の
唱えの声きゝすて壺かそりぞ　人
ゆくゝみるゝ雪の跡しくのゝゝ　雪
後をひよくやいふのゝゝあき　同
ゝゝゝゝゝゝ曲あをするぶみすき　越
行跡をゝゝかへる浪人　人
ゝゝ垣を礎さうてゝ一川脱　嵐
明日を形友ゝゝ春の月影　雪
ゝゝゝの乃翠ゝゝ信みる女ゝ　越
つきゝの醫者乃後姿や　人
ちるむ月ゝゝゝゝれゝも盛　雪
ゝゝゝゝゝゝ仏をいふゝん　越

野水

泊雲やことゝしのひさゝる桐の木に

月のみうきやしをゝの名起　落梧

山川や鵜の嘴ものとさゝうすん　仝

猶奈遠かゝえるかとなる　野水

杜鵑ふさま押合月は草外つ　同

あゝとゝしも櫃ゆゝ萩　落梧

川越乃岩ゑ[illegible]の雨　水
れふを痛うる[illegible]のさゝなさ　梧
つらせてをりるくかゝる緣の下　水
すゝくさ[illegible]ふ比のうゝ[illegible]　梧
文[illegible]の沖ちそむつゝとあ[illegible]　水
とそゝり[illegible]す相伯[illegible]　梧
[illegible]の松あちあ[illegible]を[illegible]　水
[illegible]ちのゝ[illegible]の[illegible]さ　梧

烹さ[illegible]ま[illegible]ま[illegible]文さ　水
下[illegible]皆いく月のおろき　梧
耳や歯やゝ[illegible]ゝ[illegible]　水
[illegible]ふの初午　梧
いゝ[illegible]ぬ[illegible]　同
山伏[illegible]人[illegible]　水
ゝ[illegible]ぬ[illegible]る茅車　梧
桃[illegible]園さ[illegible]　水

何ものを活けるか髮を振おほひ　梧

さらく地もいまは秋なりさ　水

さらしとものやうる馬ゆくのせなく　梧

うるふ月を餘所のうらみ　水

雨せきあへずもれちるく面白や　梧

柳ちるもの心の例の道　水

新なるく月てさゝ秋五十角　同

寂しさ秋我女まゝ　梧

白と上まく色をあらるゝやし　水

秋ふるまゝ世にいらくの酒　仝

秋ものの千奥佛るゝ川柏さ　梧

誰ゝ武蔵へ見て行　同

まゝ秋乃ゝ峠ゝ過　水

わくらとゝ絵へと雲雀哭　梧

一星霜賣きいつゝ名殘と　一井

かきひの支ゝ絶氷る朔　嵐弾

さきくちゆ正木をゝ引き後ゝ尾　胡及

肩きぬきつゝ酒さゝゝふ人　長虹

夕月孤入きゝ早き掘ゝきハ　嵐弾

たゝゝに郷きつゝゝゝむ秋　一井

里洩く踊あり二三月　長虹

玄同ゝ妻とかれら歩　胡及

問ふ紙ゝ涙ゝ面のうち　一井

菖蒲とゝさて切かく文　嵐弾

うゝ山と寝起なのゝ洩とうす　胡及

ゝゆく東半の越　雪鋤　長虹

なゝゝゝよゝあひてゝゝ　嵐弾

蛤とゝゝゝ女中　一井

涌風ゝ脛吹まくる月洩ゝ　長虹

みるもかゝゝ紀伊の国魂　胡及

ゝ者乃さゝ矢射てゝる弟の隈　一井

蒜ゝゝ如香ゝ遠さゝゝ　嵐弾

はるのゝ紙あゝとゝ　胡及

氏の子乃綿乃稲さ落つ　長虹

ゝ部ゝゝる内もさいゝゝ度　嵐弾

座敷ゝもある敷屋を敷ゝ　一井

木もさすにあらぬ松の枝　長虹

秤にうる人へ〳〵乃真　胡及

けふさなるとて魚の脚をあさ　一井

ゆくゝも世をうつい蕉人月　嵐弾

蕎麦ゝ隣子の張ちうそをさ　胡及

こさゝるをうつむ菊の　長虹

涉を掛入るこの夕のちるを　嵐弾

衣引かるる人のうく　青　一井

毒なりと瓜一ちぎを吟めり　長虹

片風ふらるる秋　白雨　胡及

板屋ゝ端雨なき庭の月　一井

さゝ引ぬきるを見ぬ　嵐弾

ゆくゝ日の雲ぬ雲　長虹

見わたすかとゝ　胡及

寛政七年乙卯春三月再刻

皇都書林

筒井庄兵衛
中川藤四郎 梓
野田治兵衛 行

芭蕉翁
俳諧七部集續編

小刻全部二冊出來